



北海道公立大学法人
札幌医科大学
Sapporo Medical University

札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor*

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	「基本動詞 + 名詞」の用法について-英語表現力向上のために-
Author(s)	根本, 愼
Citation	札幌医科大学保健医療学部紀要,第 1 号: 51-57
Issue Date	1997 年
DOI	10.15114/bshs.1.51
Doc URL	http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6600
Type	Journal Article
Additional Information	
File Information	n13449192151.pdf

- コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
- 利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- 著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

「基本動詞＋名詞」の用法について －英語表現力向上のために－

根 本 愼

札幌医科大学保健医療学部一般教育科

要 旨

英語に見られる特徴的な表現型として「基本動詞＋名詞の」がある。ここで扱う表現型は主として動作・行為を表現するためのものである。主たる動作・行為の内容は基本動詞に続く名詞によってが表示される。動作内容を主動詞で表す表現型とは対照的である。

外国語としての英語教育ではこの表現型、「基本動詞＋名詞」にはあまり重点が置かれていない。本稿では、この表現型の特徴を述べ、この表現型の特徴を再考し、さらに活用すべき表現型であることを述べる。学習者はこの表現型に対する理解を表現能力に転換できるよう運用能力を定着させる必要性がある。学習者は単に定まった表現を記憶の中から選び出すのではなく、自分の経験・視点を通して自らの表現を組立て、作り上げることが可能であることを述べる。そのために、教える側で準備すべき事柄にも触れる。

<索引用語> 英語表現型、英語基本動詞、動作名詞、英語表現能力、ベーシック・イングリッシュ

はじめに

英語の中で使用頻度の高い、比較的限られた数の動詞がある。このような動詞として do、have、give、make、put、turn などが挙げられる。これらは学習の早い段階から用いられる動詞であり、そのような基本動詞の意味範囲や働きは広い。その中で、have、give、take、make などの動詞が主として動作を表す名詞を目的語として取る表現型がある。Quirk et al. (1985)¹⁾ではこのような目的語となる名詞を 'eventive object' と呼んでいる。'eventive object' とは動詞と同型の名詞、または、動詞から派生した、主に動作・行為を表す名詞を指す。

- (1) a. We have a walk in the park.
b. She gave Mary a smile.
c. He took a deep breath.

これらの表現には次のような対応表現も考えられる。

- (2) a. We walked in the park.

- b. She smiled at Mary.
c. He breathed deeply.

(1)の各表現は、(2)で用いられている動詞 walk、smile、breathe などの動詞を基本的動詞を用いて分析的に表現したものと言える。このような表現型は近代英語から見られる英語表現の一特徴である。

Jespersen (1961)²⁾は、これらの基本動詞は人称・時制を担うだけの意味の上は軽い動詞 (light verbs) であって、実質的な意味を表す語は目的語であると考えている。また、Poutsma (1926)³⁾は基本動詞について、明確な意味を持たない連結機能を持った動詞であると考え、「基本動詞＋名詞」型を自動詞的働きを持った群動詞としている。

Sinclair & Renouf (1988)⁴⁾は、このような基本動詞の用法を基本動詞自体は語彙的意味の薄い用法 (delexical use) であるが、特定の語と結び付いてよく用いられる表現であると述べている。

Dixon (1991)⁵⁾、Stein (1991)⁶⁾では基本動詞 have、give、take などが目的語を取る表現型について、それぞれの動詞表現型に固有の意味区分があると述べている。動詞 give の場合 (例えば、give a push /

glance; give permission / encouragement) では、主語によって示される、行為者が行う行為・動作・所作を表し、また、間接目的語が示されている場合は、行為の移動、向けられた方向、到達点を示す。動詞 have の場合 (例えば、have a (n) shave / look / effect) では、ある行為・状態が一定時間持続する。主語は通常人であり、述部で示される行為の受け手、経験する人 (experiencer) であることを示す。また、動詞 take の場合 (例えば、take a break / breath) では、繰り返し可能なひとつの行為、動作で完結するような種類の動作で、起点に焦点が当たっている。主語の意志によっておこなわれる行為を表すなど、特定の意味特性を持っているとしている。

本稿ではこのような「基本動詞+名詞」構文についてその目的語とのつながりを考察し、現在の英語教育においてこのような構文に習熟することの意義について述べたい。

「基本動詞 make + 名詞」構文

have, give, takeなどの動詞は、‘have a chat / give a look / take a swim’などのように目的語として動詞の原形と同型の名詞を取る例は多い。目的語の意味内容からこれらの表現型では身体的な行為・行動を表すと考えられる。これに対して、「基本動詞 make + 名詞」の表現としては次のような用例が挙げられる。

- (3) make a reply / (an) answer /
 a protest / a request /
 an offer / a mistake /
 a change / an effort /
 a progress
 a statement / a suggestion /
 complaint / confession /
 an enquiry / a decision /
 a criticism

have, take, giveなどの動詞と同じように動詞原形と同型の名詞や、動詞から派生した名詞との結び付きが見られる。しかし、‘make an answer’のような動詞原形と同型の名詞を目的語として取る例はあまり多くなく、動詞からの派生名詞が多く見られる。基本動詞に続く目的語から考えると「make + 名詞」によって表わされる内容は、身体的な単発的動作や所作ではなく、判断・処理等を経て完結する事柄、あるプロセスを必要とする一纏まりの行為を示す。具体的実行される所作・動作とは異なる客観的、一般的な行為を指す内容の目的語を取るとも言える。起点を意味内容として含む「take+名詞」構文とは対照的に、ある行為の到達点、完結点を

指向していると考えられる。また、この行為をはっきりとした意志を持って、行うことを明示できる。

動作の時間的な経過で比較すると、「take+名詞」、「give+名詞」で示される動作・行為、「have+名詞」、「make+名詞」で表される動作・行為にはそれぞれ意味特性が見られる。‘give’には、目的語 (名詞) で示されるものが、始点である主語からの移動、間接目的語がある場合にはその到達点までの移動を示す。‘take’には、あるものを取り上げるという意味内容を持ち、ともに一回性の動作・行為を指す。これに対して、‘have’にはある状態にいること、ある状態・行為が一定時間継続・持続することを示す。‘make’には、ある事柄・状態を生み出す、創出・変換するという意味が基底にある。(3)の表現には、基本動詞それぞれの意味特性を含んでいると考えられる。

- (4) a. give a glance
 b. take a step
 c. have a look
 d. make a change

コリンズCOBUILD英語辞典(1987)ではいくつかの基本動詞の項で次のような記述を最初に掲げている：

Make is one of the most common verbs in English. It is often used in expressions where *it does not have a very distinct meaning of its own, but where most of the meaning is in the noun that follows it*. So, for example, ‘he made an enquiry’ means almost the same as ‘he enquired.’ This structure is often chosen in order to suggest that the action is more deliberate, or in order to give more information about the noun. (make の項、p. 877. 斜字体筆者)

この辞典でも「基本動詞+名詞」構文における動詞には、はっきりとした意味はなく目的語がより多くの意味を担っているとしている。

語彙的意味の薄い基本動詞としては‘do’が考えられる。

- (5) a. do a report
 b. do writing / painting
 do the shopping / washing
 c. do the sights (of) / the dishes
 d. do the big

(5c, 5d)の目的語にはその名詞の意味に関連した事柄を指しており、意味の拡張が見られる。具体的な事柄

から比喩・換喩などを通じての意味の拡張は言葉の働きとしてよく見られる。基本動詞の中でも行動を示す、原初的動詞である。

ここで対象としている「基本動詞+名詞」構文は特定の行為を、動詞1語で表現するのではなくいくつかの語との結びつきで表現する形式であって、特定の語がどの程度の意味を担っているかを考えることではない。この用法には固有の表現機能を持っている。特定の語がどの程度意味を担えるかを考えるのは英語表現が個々の単語の持つ意味内容の合計で算出できると考えるからである。「基本動詞+名詞」という枠組みの中で表現される形式であるのに基本動詞の意味内容に限定して考えることは適切ではない。一つの語句群による表現形式があるというのは何ら特異なことではないであろう。

一つの動詞で表現可能な事柄を分析的に表現するのであるから意味表現の分化があって当然である。このような表現型に対応した意味内容の提示の仕方を持っているからである。この表現型によって行為の内容を目的語となる名詞により具体的に際出させて提示できる。更に、目的語を修飾することにより目的語として明示された行為に説明を加えることが出来る（例えば、‘make a rude reply’、‘take a deep breath’など）。この構文により目的語（名詞）に述部の実質の意味を担わせ、中心的意味内容を文末に置くことができる。このことは情報を伝える位置として効果的な文末を利用することになり、読み手・聞き手の関心を引き付けることができる。「基本動詞+名詞」の構文はこのような文体的効果を期待できる働きを持っている。

基本動詞 make には元来生み出す、作り出す、ある状態・状況を作り出すなどの変換・創出の意味が備わっており、コリンズ COBUILD 英語辞典(1995)⁸⁾ではこれらの基本動詞に関する記述の方式が前の版とは異なっており、主要な意味範囲による用法説明に変わっている。それに基づいて考えれば「make + 名詞」構文で表される内容は、「(have / take / give) + 名詞」構文とは異なる。このため次のような語句の意味合いがそれぞれ異なるのは考えられる。「基本動詞+名詞」構文が必ずしも名詞によって示された行為を指すのではなく、基本動詞の意味特性の現れ方の強弱、この結合形式が一纏まりの意味機能を表すか否かなどによって異なる。

次の(5)のような表現では、ある行動・行為を表しながらも、目的語とは別に基本動詞としての意味特性を保持していると考えられる。

- (6) a. make suggestions
give suggestions
have suggestions
make suggestions
b. have a drink

give a drink
take a drink
make a drink

広い行為を表す‘do’とは異なって、基本動詞は更に限定された意味区分・働きを持っているため、目的語となる名詞によって示される行為は先行する動詞によっても規定されることになる。

しかし、意味上差の生じない場合もある。次の(7)に見られるような連語表現 (collocations) であると考えられる面もある。

- (7) a. make a speech ~ give a speech
b. make a call ~ give a call

また、「基本動詞+名詞」構文における基本動詞の選択に関して、イギリス英語、アメリカ英語、オーストラリア英語等で変異が見られる⁹⁾。これらの基本動詞を語彙の意味が薄い delexical verb と呼ぶほどその意味が希薄なのではなく、それらの動詞がカバーする範囲が広いからとも言える。

英語における動詞表現を考えるときに、単一の動詞で表現するか、動詞と他の品詞による結合形を採る（例えば、‘replied rudely’、‘make a rude reply’）かは選択の問題であろう。しかし、Sinclair & Renouf (1988)¹⁰⁾は英語表現の中に見られる一大特徴であるにも関わらず、外国語教授法のための教本などではっきりと扱われ、教えられていないと述べている。確かに、話し手、書き手の表現意図とも関係するが、用いることが出来る表現型の一選択肢としてあるのであるから、教える項目として考えるべき表現型である。相沢 (1995)¹¹⁾にも日本人大学生の「基本動詞+名詞」用法についての理解・定着が十分でないとの報告がある。この表現型は必ずしも定まった定式表現ではなく、動詞に続く目的語との結合により英語表現一般に拡大し、応用できる表現型である。

「基本動詞+名詞」構文の運用能力

日本人学生の英語能力、とりわけ発信型の英語能力を養うことが必要だと言われて久しい。確かに挨拶のための表現はできて、それから先へ続けることは難しい状態が見受けられる。だからといって今まで教えられた事柄が適切ではなかったとはかならずしも言えない。従来教えられた事柄が英語表現を理解する面に重点が置かれて来たことはあろう。しかし、その能力を伸ばすことは必要であったし、これからも変わるものではない。教育カリキュラムで扱うことのできる項目が限られている中で、英語の理解力と表現能力を養うための授業計画を平

行して採れなかったことにも拠る。外国語理解のために必要な背景理解まで考えるならば、教えるべき項目はまだまだ多くあると言える。

このような言語理解のための能力と表現能力との大きな違いを埋めることは必要であり、時間的に限りのある大学レベルの英語教育においても、一つの表現型として、「基本動詞+名詞」構文を考える必要がある。

英語の動詞を考えて見ると多くの動詞は方向、様態、対象などを含んでおり、それらを分解して表現することが可能である。Dixon (1973)¹²⁾、池上 (1981)¹³⁾ などではできるだけ多くの動詞に共通する意味成分を持つ基本動詞の枠組みが明らかにすることによって、他の動詞を更に限定して記述できるはずであると述べている。基本動詞は特定の意味を持った動詞であるとともに、状態を生成したり変換する操作詞としての働きもあり、更に前置詞、副詞等と繋がることによって、その表現機能は極めて大きい。

- (8) pass = go by
 descend = go down
 leave = go away
 compose = make or create by
 putting together parts or elements
 produce = make or process (a raw
 material) into a finished product,
 especially by means of a large-scale
 industrial operation

基本動詞に関連して想起されるものに1930年代に提唱された「ベーシック・イングリッシュ (Basic English)」の運動がある。「ベーシック・イングリッシュ」の運動は850語の英単語を用いて英語表現の可能性を実証するものであった。そこで必要と考えられた動詞の数は16であった¹⁴⁾。少数の動詞を補うのは英語における分析的表現を多用すること、コンテキストに依存すること、具体的表現からメタファーによる表現を用いることなどによって可能であると考えられた。Ogden (1960)¹⁵⁾、Daniels (1969)¹⁶⁾などは、「ベーシック・イングリッシュ」の成果を示すものである。

日本人の英語学習者は英語表現を理解することに力が注がれていたため、動詞に対しても扱われた表現を理解できる範囲内の意味、英語動詞に対する日本語で表された意味との対応関係で理解することが多い。このことから英語で表現する際にも学んだ日本語から英語への対応で考えることは当然であるかもしれない。

巻下 (1984)¹⁷⁾ では、日本語で書かれた文章を、日本人と英米人が英語へ訳出した例を比較している。日本人による訳例に見られる動詞は動詞1語で訳されることが多く見られる。それに対して英米人の訳には一つの動詞

が種々の意味に用いられったり、動詞と名詞・動詞と前置詞の結合等による多彩な表現が見られる。このことから日本人の英語語彙の意味を日本語で捉える場合には、その意味を狭く受け取りすぎているからではないかと指摘している。

このことは現在の学習で英語表現を日本語で理解する一種の記号解読の作業になっているとも考えられる。習得しようとする外国語は母国語の仕組みとは異なった形で存在し、その表現形態は固定されていて、ただ受け入れなければならないものであるならば、外国語学習は苦痛を伴うことである。また語彙の意味内容を日本語との一対一の対応関係で理解し、それにより英語表現が必要な場合も日本語から対応する英語を求めようとするがその対応語が即座には思い浮かばない。そこで表現しようとする道が閉ざされてしまうことが多いからであろうと考えられる。

Ogden & Richards (1985)¹⁸⁾ は、思想、言語表現、指示の間の関連性について次のように述べている。

Between a thought and a symbol causal relations hold... Between the Thought and the Referent there is also a relation... Between the symbol and the referent there is no relevant relation other than the indirect one, which consists in its being used by someone to stand for a referent. Symbol and Referent, that is to say, are not connected directly (and when, for grammatical reasons, we imply such a relation, it will merely be an imputed, as opposed to a real, relation) but only indirectly round the two sides of the triangle.

文法は外国語学習に欠かせない面を持っているが、外国語表現とその意味が文法を通じて一対一の関係にあるとする見方を植えて付けている可能性がある。オグデンと、リチャードによる上掲の引用文では、ある表現とそれが指し示すものとは直結しているのではなく、ただ表現する人の思考を通しての関係にすぎないとしている。一対一の対応関係が全く存在しないとは言えないとしても、ある内容を表す表現が複数ある場合も多いということは考えられる。

室 (1985)¹⁹⁾ には日本の茶会の心得である「一期一会」という表現を「ベーシック・イングリッシュ」の語彙を用いて表現した訳例46例を掲げている。このことは、学習者の視点や経験を通じた表現が可能であることを示している。それ故、学習者に対して、言葉が用いられるコンテキストの中で、少々説明的になっても話し手の経験を通して表現を作り上げることが可能であることを示す

必要があろう。分析的表現によりある程度の表現が可能であれば、日本語との対応関係を抛らなくとも、学習者は自ら表現を組み立てていくことができる。学習者が表現する際に自由度があること、母国語を介在させない状態にすることは重要なことである。

現在の大学生が持っている語彙レベルを考えると、「ベーシック・イングリッシュ」で考えられているような基本動詞の制限を課す必要はない。しかし、基本動詞の働き全体をを理解し、英語表現のために運用できるようにすることは発信型の英語能力を養うためには必要である。このためには基本的な点を見直し、辞書的な意味・表現に拘束されずに活用できることを学習者に伝えなければならない。分析的な表現を用いることにより表現は具体的な内容から始めることになる。具体的な内容から始まる表現であっても、文脈に依存しながら、具体から抽象へ拡張しようとする言葉の働き、または表現を生み出す人の見方を活用することになる。そのためにも学習者が持つ既知の事柄を活用し、表現能力に換えることが必要である。

結 び

表現能力を養うための一表現型として「基本動詞＋名詞」構文を考えてきた。行為を表す構文としては簡単な組み合わせであるが、運用の面で考慮しなければならないいくつかの課題が残されている。用いられる動詞が限られたものであるから、当然目的語による明示的表現が必要となる。そのためにも目的語となる名詞表現に関しての語彙リストが必要である。学習者が用いることのできる使用頻度の高い名詞、意味の上で一般性を持った名詞のリストを作成すること、加えて、一般性を持った語を核として、更に細分化した意味を表す関連語のリストが求められる。このような語彙の検討としては Carter & McCarthy (eds.) (1988)²⁰⁾がある。

「基本動詞＋名詞」構文を用いた学生の表現に対してそれが適切な表現、受け入れ可能な表現、理解可能な表現であるのかの判断を与えることが出来ることが望ましい。そのためには、教える側の用意が必要である。ティーム・ティーチング等によって対処法を準備しなければならない。

語彙の問題、表現・連語に関する適切性の判断は、日本語と英語の表現・発想法の違いに関係してくることもある。これに対する対処も必要であるが、外国語としてのどのレベルまで求めるかという選択になる。英語を母国語とする話し手に近づこうとするのか、英語を国際補助語として考えるのかなどの目標によって到達点は異なって来る。

同じ英語の話し手の中にも変異があることは外国語の話し手も臆せず表現が出来ることではないだろうか。先

ずは学習者が表現することが重要で、それが通じるか否かに対処する言葉の上でのやりとりはできるはずである。母国語で話を交わす中にも試行錯誤、言い違い、間違いによる確認・修正等の措置はあるのであるから、表現してみることが大切であろう。細かな違いにこだわらず、話せるようになりたいという学習者の意欲を導き、表現の可能性を実感できるよう対処する必要がある。

文 献

- 1) Quirk, R. et al. : *A Comprehensive Grammar of English Language*. London, Longman, 1985.
- 2) Jespersen, O. : *A Modern English Grammar on Historical Principles VI*. London, George Allen & Unwin, 1961.
- 3) Poutsma, H. : *A Grammar of Late Modern English (Part II, Section II)*. Groningen, P. Noordhoff, pp. 394 - 400.
- 4) Sinclair, J. M. and A. Renouf. : 'Lexical Syllabus for Language Learner.' In : R. Carter and M. McCarthy (eds.), *Vocabulary and Language Teaching*. London, Longman, 1988, 153.
- 5) Dixon, R. M. W. : *A New Approach to English Grammar on Semantic Principles*. Oxford, Clarendon, 1991, p. 337ff.
- 6) Stein, G. : " The Phrasal Verb Type 'to Have a Look' in Modern English." *IRAL XXIX/1*: 1-29, 1991.
- 7) Sinclair, J. M. et al. (eds.) : *Collins COBUILD English Language Dictionary*. London, Collins, 1987.
- 8) Sinclair, J. M. et al. (eds.) : *Collins COBUILD English Language Dictionary*. London, HarperCollins, 1995, p. 153.
- 9) 基本動詞の選択に見られる変異について、次のような観察報告がある。
Dixon, R. M. W. : *A New Approach to English Grammar on Semantic Principles*. Oxford, Clarendon, 1991, p. 338. ; Wierzbicka, A. : 'Why can You Have a Drink When You can't *Have an Eat?' *Lang.* 58 (4) : 756 - 757, 1982.
- 10) Sinclair and Renouf : *op. cit.*, p. 153.
- 11) 相沢圭子 『ベーシック・イングリッシュ再考』 東京, リーベル出版社, 1995, pp. 154 - 155.
- 12) Dixon, R. M. W. : 'The Semantics of Giving.' In M. Gross et al. (eds.), *The Formal Analysis of Natural Languages*. Paris, Mouton, 1973, 205 - 223
- 13) 池上嘉彦 『「する」と「なる」の言語学』 東京, 大修館書店, 1981, p. 9.

- 14) 「ベーシック・イングリッシュ」で、基礎動作語として用いられる動詞は、be、do、have、come、go、get、give、put、take、make、keep、let、seem、say、see、send の16語である。
- 15) Ogden, C. K. : *The General Basic English Dictionary*. Tokyo, The Hokuseido Press, 1960.
- 16) Daniels, F. J. : *Basic English Writers' Japanese-English Dictionary*. Tokyo, The Hokuseido Press, 1969.
- 17) 卷下吉夫 『日本語から見た英語表現』 東京, 研究社出版, 1984, pp. 4 - 35.
- 18) Ogden, C. K. and I. A. Richards. *The Meaning of Meaning*. London, ARK PAPERBACKS, 1985, pp. 11 - 12.
- 19) 室 勝 『ベーシック・イングリッシュ入門』 東京, 洋販出版, 1985, pp. 37 - 39.
- 20) Carter, R. A. & M. McCarthy (eds.) : *Vocabulary and Language Teaching*. London, Longman, 1988, 146 - 151.

On the Usage of *Basic Verbs Plus Noun Constructions* for the Improvement of Language Production

Makoto NEMOTO

Department of Liberal Arts and Sciences, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

Abstract

One of the major features of English language usage is the construction with a basic verb as the main verb directly followed by a noun. This pattern is mainly designed to signify actions or performance, and it has functions and characteristics of its own. The construction, however, has not had enough attention paid to it in teaching English as a foreign language.

Reference will be made to the implications the construction has in teaching and learning English. More emphasis should be placed on the intake of the usage for students. Students should be more familiar with the construction not only for reception but also for their production of English. The intake will lead the students to improve their abilities in English production.

Key words : Construction, Basic verbs, Action nouns, Abilities in English production,
Basic English